

二〇一五年度 卒業論文

コピーー 禁廠

今村恵猛と初期ハワイ開教

L120130

村上 響

目次

序論

本論

第一章 今村恵猛の生涯

第一節 今村の渡布以前

第二節 今村の渡布以後

第二章 今村恵猛とアメリカニゼーション

第一節 アメリカニゼーションの誤解

第二節 今村のアメリカニズム

第三章 今村恵猛と真宗の主体性

結論

註

参考文献

1 4 4 5 4 4 4 4 1 2 6 2 3 1 8 1 4 1 4 5 4 4 4 1

著作権厳禁

序論

今村恵猛(1867—1932)は、浄土真宗本願寺派が本格的な海外開教に着手して間もない1899年に3歳で開教使として現地赴任し、1901年には初代開教監督里見法爾の後を受け継いで、1901年に第二代開教監督に就任する。今村はその後、1932年に心臓発作で急死するまでの三十二年間、ハワイにおける本願寺派教団(以後、ハワイ教団)の基礎を築き、その発展に大きく貢献した人物である。

今村の主な功績として、次の四つが挙げられる。一つ目は、ハワイ教団の機構を僧侶中心から信徒を中心に据えたこと。二つ目に、英語伝道部を創立して、日系二世と白人への英語の布教伝道を行い、まだ、仏教伝播の黎明期であったアメリカにおいて、仏教の地位を高めたことが挙げられる。三つ目に、日本人移民の為に学校の設立に尽力したこと。そして、四つ目に、現在のハワイ別院の建物を建立したことである。

過去に真宗学という側面から、今村恵猛について行われた研究はほとんどない。しかし、宗教思想史という側面からは、阪南大学の守屋友江氏が今村恵猛について『アメリカ仏教の誕生—二〇世紀初頭における日系宗教の文化変容—』(現代資料出版、2001年)というタイトルの著作を書かれている。また、龍谷大学の嵩満也氏は、初期ハワイ教団による開教活動と今村恵猛との関係について焦点を当てた「初期ハワイ本願寺教団と今村恵猛」という論文を書かれているが、管見によれば、これら以外の今村に関する研究書や論文は多くない。

今村恵猛の功績が今まで、あまり西本願寺教団やハワイ教団において取り上げられなかったことについて、守屋氏は

日本の本願寺教団とハワイの今村たちとの間に思想的なへだたりが生じていったことがあげられる。(中略) 今村は、日本的な布教方法や教団運営を離れて、アメリカの文化的風土に即して仏教教義を再解釈していく必要性を訴えていた。そのことが、本山の方針と相容れないため、今村の思想や活動が無視されることにながったのではないかと思われる。¹

と、指摘している。また、今村が亡くなった後に太平洋戦争が起こり、アメリカにおいて日本人は敵性外国人とみなされ、その疑いを避けるため当時の資料の多くが焼却処分されたことなどによる史料不足の影響もあるだろう。

本論文では、今村自身の著作物を検討するに当たって、不二出版より出ている『仏教海外開教史資料集成 第3巻』(不二出版、2007年)に、今村の死後に編纂された彼自身の著述が収録されている『超勝院遺文集』と『米国の精神を論ず』を参照した。しかし、守屋氏によると『超勝院遺文集』には、雑誌論文や新聞記事の年代が必ずしも正確でないことや、講演を録音したものの場合、話された場所が記されていないなどの問題をはらんでいるという点に注意が必要である。

当時ハワイには日本人移民が多く居住し、今村がハワイ別院を新築した1910年代頃には、日本人移民が日本から妻子を呼ぶ、いわゆるピクチャー・ブライドが行われ、家庭を持つ日本人移民が増えるなど、日本人移民社会が安定期を迎えていた。その点において、同時期に行われていたアジア地域への布教に比べて、組織や財政面において比較的安定していたため、ハワイ独自の開教が行われていたようである。²

また、日本人移民にとってのホスト社会であるアメリカ社会では、当時、急激に増加する日本人移民に対して排斥運動が起こっていた。ヨーロッパ圏の宗教（特に、キリスト教でない）仏教は、偶像崇拜をする野蛮民族の宗教とみなされていた。それらの批判に対し、今村はそもそもアメリカという国は、その建国の理念からして宗教の自由があると主張するのである。そこに、彼のアメリカにおける仏教伝道の思想の特色が垣間見られると私は考える。

以上のことから考えて、今村のハワイでの布教の方針は、当時の日本における、いわゆる本山主導の布教の方針と違う独自性があった、もしくは、生まれつつあったのではないか。

本論文では、歴史的な史料の分析については、主に守屋氏の『アメリカ仏教の誕生』を参考にしつつ、これまで真宗学においてスポットを当てられることの少なかった今村恵猛に注目し、当時今村が、京都の本山から遠く離れたハワイにおいてどのような布教を現地の人々に対して行ったのかを検討することを通して、彼がハワイで展開した真宗教義伝道の特色を取り上げたいと思う。

なお、本論文では、今村の著述の引用文の仮名使いなどは、読解の便宜のため、適宜、現代仮名遣いに改めて示した。

本論

第一章 今村恵猛の生涯

第一節 今村の渡布以前

本節の今村恵猛の生い立ちについては、主に守屋氏の『アメリカ仏教の誕生』を元に述べていく。

今村恵猛（俗名 猛）は、1867年5月27日に、現在の福井県福井市小路町にある西本願寺派専徳寺に、父恵実と母光江の長男として生まれる。母光江を1870年9月に亡くし、弟の恵雲も1871年4月に亡くしている。その後、初代ハワイ布教監督になる里見法爾の姉である、里見政尾が今村家に嫁いだ。

今村は1876年に得度している。さらに1884年7月には、西本願寺派の勸学である阿満得聞あまとくもんの自坊である、京都伏見の西本願寺派西養寺にあった私塾「荷法館」に父恵実とともに入門している。

得聞の下で少年時代を過ごした後は、西本願寺が新設した普通教校（1888年に「文学寮」へ学制改定）に入学する。そこで、今村は「反省会」の会員として活動する。反省会とは、1885年頃、普通教校の学生有志による「禁酒会」を母体としている。真宗では戒律を説かないので飲酒を戒める必要はないのであるが、禁酒によってモラルと風習を改革し、文明化へ歩を進めるためであり、仏教徒における精神面での近代化を図ろうという運動であった。

今村は、反省会で、「仏教青年ノ集合体ヲ要ス」（『龍谷大学仏教文化研究叢書13 反省（會）雑誌』、龍谷大学仏教文化研究所、2005年）という論説を出している。そこで、今村は当時の日本仏教を貴族的の門閥を

崇拜する仏教であると批判し、経験のある大人よりも、寺族・在家を問わず様々な青年を集めた集合体を作ることを提案している。ここより、今村がハワイの開教監督に就任してすぐに立ち上げた、佛教青年会の活動目的に通じるものが、既にこの時期から現れていることが知られる。

今村恵猛は、1890年7月15日に文学寮を卒業した後、本願寺の内地留学生制度を利用して、1891年3月に慶應義塾大学文学科に入学する。

慶應義塾大学を卒業後は、徳島県と福井県で教員をしていたようである。

第二節 今村の渡布以後

『海外開教要覧』（海外開教要覧刊行委員会、1944年）によると、西本願寺による正式なハワイ開教は、1898年に福井県出身の里見法爾が初代布教監督としてハワイに赴任することにより開始される。

しかし、それより以前に、1889年に大分県出身の曜日蒼龍かがいが開教視察として、ハワイへ赴いている。

『ハワイ開教小史 ハワイ本派本願寺』（百華苑、1999年）によると、曜日は、ハワイに約五ヶ月間滞在し、その間にオアフ島のホノルルとハワイ島のヒロの2か所に布教所を設けた。曜日の関心は、『仏教国際ネットワークの源流 海外宣教会（1888年～1893年）の光と影』（中西直樹・吉永進一、三人社、2015年）によると、教義上の問題より、出稼ぎ者の実態に即して、どのような布教体制を構築するかに向けられていたようである。

しかし、曜日がハワイを去ってから約十年の時間が経ち、その間に僧侶を名乗って不正を働く者が少なくなかった。親鸞聖人六百五十回大遠忌の記念として、布哇別院の新築を記念して、布哇開教二十年の歴史をまとめた『本派本願寺布哇開教史』（本派本願寺布哇開教教務所、1918年）には、開教事業の四大困難の一つとして、これを挙げている。これによると、「本願寺の正式開教以前に於て自ら眞宗僧侶と称する野狐の輩、任意布教に従事し、或は寺院造營の名を仮りて寄附金を収め之を私消し、或は置酒遊蕩館府の悪風と和し、汚行を恣にして、為に眞宗僧侶の聲價せいかを失墜せしこと尠せうなからず」とあるように、眞宗僧侶を名乗って、日本人移民から金銭をだまし取り、それを個人で使い込んでいたものがいたようで、本願寺の正式開教が始まってからもそれが開教の弊害となっていた。

しかし、日本人移民への布教について、

我眞宗は天台眞言等の貴族的佛教、浄土禪等の武士的佛教ののちに出て、平民を對機とせる平民教なり。

肉食を嫌はず、妻帯を辭せず、貴賤を簡ばず、貧富を問はず、學不學賢愚をも差別せざる平等教なり。（中略）故に親鸞聖人の眼より見れば資本家尊ぶべからざるに非ずと雖、勞働者最も愛すべく、外人敬す可らざるに非ずと雖、同胞最も親むべく、移民會社、日本官憲等の嘲りて田舎者視したる耕地勞働者は、實に弥陀救済の主賓たり正客たるものなり。⁴

と、眞宗の教えは、人を選ばない教えではあるけれども、移民会社や日本の役人から虐げられている労働者こそ、弥陀の救済の目当てであると、開教の教旨を明らかにしている。

西本願寺は、曜日の後に、開教視察として宮本恵順を派遣する。宮本は、ホノルルとヒロの信徒から西本願寺への開教の嘆願書を持って帰国し、西本願寺による正式な開教の必要性を説いた。それを認めた本願寺は、以後ハワイへの本格的な開教に着手するのである。

『本派本願寺布哇開教三十五年紀要』（本派本願寺布哇開教教務所、1931年）によると、初代ハワイの開教監督として今村恵猛の伯父あたる、里見法爾が選ばれる。里見は、門信徒の懇志やハワイ仏教徒であるメリ・四・フオスター夫人の協力を得て1899年の末にホノルル布教所を建立している。

里見は、1898年9月に本山の命で一時日本に帰国しており、翌年、1899年2月に今村を伴って、ハワイへ来布している。それまで、ホノルルの布教場は借家を使った仮布教場であったが、1899年の12月に新しい布教場を建設している。

この年の12月中旬には、ペストが流行り、加えて翌年の1月には、ホノルル市内の日本人街が大火によって焦土と化し、里見と今村は、日本人移民者の為に救護や義援金を集める活動に奔走した。『本派本願寺布哇開教三十五年紀要』によると、この時の大火で里見・今村らの活動を受けて、平素佛教は社会に無用とと思っていた人でも、この時の救助を受けて、佛教の慈悲に感涙したそうである。

1900年1月に、里見は本山から他の職に転じるよう命じられて、日本へ帰国し、里見の後継者として、今村が布教監督（1906年に開教総長）に就任した。ここから、およそ三十年間、今村を中心としたハワイの布教活動が本格的に始まるのである。

今村はまず、1900年7月に、青年の教化と精神上の修養を目指して、布哇佛教青年会を結成し、青年層への布教活動を展開する。佛青の活動は、多岐に渡り、演劇部、図書部、音楽部、運動部などの運動・文化活動から、青年の職業斡旋をしたり、市民啓発運動、赤十字運動等の社会的事業はもちろん、仏典輪読会や野外伝道などの布教活動も行なっていた。

また、今村自ら主任となつて、英語夜学校を開き青年へ英語を教えた。『日本佛教渡米史』（常光浩然、佛教出版局、1964年）によれば、この計画に賛同したアメリカ人であるメシク夫人や「ハーバーは、無報酬で英語教育の担当をしている。

1901年には月刊機関誌『同胞』が刊行されることとなる。『同胞』には、今村の論説が数多く掲載されている。

また、1930年には、この佛教青年会と英語伝道部の主催のもと、「汎太平洋仏教青年会」がハワイで開催された。この国際会議には、日本、朝鮮、中国、カリフォルニアの代表が参加し、国籍が異なったもの同士が、ブツダの教えを讃え、これを盛んにすることの教義を行った。

1900年12月には、後の日曜学校となる、幼年教会が開始される。その目的は、児童の宗教教育を施すことであつた。

1902年には、ハワイ教団の教育事業として、今村は日本人子女に向けて、ホノルルの布教所内にフォート学園という日本語学校を設立した。⁵この時点での移民者の大半は、数ヶ年の予定でハワイに働きに来ている

人々だったので、設立当初は、日本人移民の子供たちが帰国した時のための日本語教育や道徳教育がその目的となった。その授業内容は、日本の小学校に準じたもので、使用された教科書も日本国内のものが使用されていた。また、白人の家庭と比べて日本人の家庭教育に欠けているものを補うという意味で、家庭教育的学校へと変化していった。

本願寺の耕地における伝道が困難であったことは、先に述べたとおりである。1904年までは、耕地に布教場は無く、今村ら開教使は、ホノルルの布教場から馬で、耕地まで布教に行っていた。しかし、1904年にオアフ島ワイパフで起きた、日本人のストライキによって状況が変わる。この年の7月に、労働者の監督であるルナが、日本人労働者を虐待したのをきっかけに、大規模なストライキが起こったのである。

当時の帝国領事館の役人が説得に行っても、全く効果がなかったが、今村が赴いて、不思議にも「佛心を基」とする説得が成功し、ストライキは収まったのである。

このことは現地の英字新聞にも掲載され

今村恵猛師は（中略）最近の同盟能工に際し、争擾じょうぶの中に入り、能工者の首領を説き、耕主と労働者との間に良好なる諒解を得せしめ、頗すこぶる効果ある解決を為されたり。監督のワイパフに於ける演説は、曩に總領事の訓告を拒絶したる群衆をして直に監督の説を聴くに至らしめたり。

佛教の監督は布哇各島にある日本人、即ち各耕地に於て最多数を占むる日本人間に重望ある人なり云云。と、今村という人物が、ハワイの各耕地において最大数である日本人にとって重要な人物であることがこのスト

ライキの騒動によって、知られることとなる。

この出来事で、耕主組合は、それまで奇異の目で見ていた本願寺の布教活動を認め、耕地の日本人たちも精神的憑依の中心を求めるようになり、各耕主もしくは、支配人は、「無条件にて永久に土地を貸与」したり、「一年壹弗」というほとんどただ同然で土地を貸してくれ、あるいは、本堂庫裏の新築の寄付をする者まであらわれるようになる。これによって、耕地の布教場が急激に増えたのである。

今村の活躍した二十世紀初頭は、まだ日本の仏教がアメリカでほとんど認知されていなかった時代である。1893年にアメリカのシカゴで行われた万国宗教大会では、日本の僧侶が講演を行っているが、まだ、アメリカ人へ仏教が浸透するには至らなかった。

『本派本願寺布哇開教三十五年紀要』の「同胞初期の状態と布教の困難」には、ハワイの当時の仏教徒の状況が「佛教といへば何となく未開野蠻の偶像教の如く見做され、内外共に降りなる事情を顧慮して、有縁の人も自ら信者と称するのを憚るの風があった」⁷と記している。

このようにキリスト教の国に移民として、来ていた日本人たちはその劣等感に押されて、三宝に帰依する真面目な仏教徒であっても寺院に参り難い状況があった。

また、「佛教を貶して未開野蠻の偶像教とし、自卑自屈寺門に出入するを恥辱となすの陋心^{ろうしん}を打破せざる可らず、之を打破するには外人自身の口を藉りて佛教を讚嘆せしむるを捷徑^{しょうけい}なりとす」⁸と、あるように、仏教の地位を底上げするには、外人に佛教について賞賛の言葉をもたらした方が近道であると示している。

そこで今村は、キリスト教の国である、アメリカのハワイで、仏教の地位を上げるべく様々な白人仏教徒たちと接触している。

『本派本願寺布哇開教史』によると、1901年2月に世界周遊中であつたヘンリー・S・オルコット（1832年—1907年）を招いて講演を行っている。⁹

『日本仏教渡米史』に紹介されているオルコットの説明を見ると、彼は、アメリカ人で仏教徒に改宗した人物で、ニューヨークで生まれてからキリスト教の教育を受けて育ち、南北戦争では、従軍して陸軍大佐になる。ところが、キリスト教に疑問をもって、インド教や仏教を研究しているうちに特に仏教に興味を持って、仏教徒に改宗している。¹⁰

オルコットは、1901年の講演では、「佛教に就て」という題で講演を行った。オルコットの講演を受けて、「佛教は日本人の間或は東洋人の間に飲み説かるるがごとくに誤解しゐたりし人士が、米人たるオルコット氏の口より佛教の講演を聞くの感は、蓋し想像に難からざるべし」との反応であつたようである。

また、1901年5月21日の宗祖降誕会では、最後のハワイ王朝女王であるリリオカラニ女王を招いている。元ハワイ王朝女王の日本の仏教の宗教行事への参加は、ハワイの新聞を大いに賑わせた。

そして、1920年に、英語伝道部を設立する。その目的は

主して米國出征青年及幼年者に對する宗教々育及英語伝道の急務に應ずる為必要なる準備をなすを目的とし、その事業内容は、一、聖典及勤式作法の英譯。二、英文佛書刊行。三、英語傳道機關の設置。四、幼年者に

對する特種英文佛書刊行。五、日曜學校用英語讀佛歌及教案の編成。六、幼少年青年の宗教々育に關する研究。七、佛教及日本文化を米人間に紹介する書籍刊行。八、佛教研究図書閱覽開設等¹¹である。

英語伝道部の主任として、M・F・カービー博士を迎え、また、ハント夫婦も英語仏教伝道に協力している。ハント夫婦は、今村自身が善知識となつて、1924年にハント夫人は別院で入門式を受け法名「眞光」と、次にハント氏も「眞覺」の法名を授与された。

毎週日曜の英語伝道には、およそ百人の白人が集まるようになり、1928年7月の入門式では、十一名の白人が来るほどの結果であつた。¹²

嵩氏によると、初期のハワイ教団の教団機構は、西本願寺教団の組織を踏襲したものであつた。1908年に創立された、開教使によつて構成される開教使會議が教団の最高決定機関の役割を担つていた。今村は、1910年代後半から、教団のアメリカ化を目指して改革をし、次第にアメリカの宗教の主流をなすキリスト教プロテスタント派の教会に見られるような信徒中心の権力構造へ変革した。また、1920年には、開教総長の代わりに、開教使の中から開教使會議の議事が選出されるようになり、1922年以降は、信徒代表もオプザーバーとして参加が認められるようになった。さらに、1923年には開教使と信徒代表から構成される議制会に名称が改められた。¹³

守屋氏の指摘によれば、今村のこうした変化は今村自身の言葉から見ることができる。『米国の精神を論ず』の

中で、「米国に生活して居るものは、如何に当初 National Mind の単純なる持ち主であつても、一年二年三年と過ぐるにつれて自然と International な機敏に感染し変化して行くのである」¹⁴と語っている。例えば、布哇中学校校長を務めていた角田柳作（1877年—1964年）による『英文真宗大意』が1914年に発刊されたことを受けて、『超勝院遺文集』に収録されている「佛教要領發刊に就て」という論説で、「浄土真宗の法義を、白人社會にも傳へたいといふ事は、當地開教以来の宿望」であり、ようやくその一歩が踏み出せたと喜んでゐる。また、「外國に於ては一人の信者が凡ての代表者と思はれるから、（中略）どうか之を機として教會員も婦人會員も青年會員も十分に法義を聴聞し、間接直接に大慈大悲の光明を世界中に及ぼす手助けとなつて戴きたいものである」と、門信徒への希望を語っている。

1906年、ハワイ教団は、浄土真宗本願寺派の別院へと昇格した。それに伴い、今村はハワイ政府へ宗教団体として、法人設立の手續きを行うが、当時のハワイ州知事に却下される。その主な理由は、本願寺の日本語学校で行っていた日本についての道德教育がアメリカの土地にふさわしくないということであった。だが、ハワイ教団の申請却下については、当時、布哇仏教青年会の英語教師をしていたリアン・S・ミーシック女史による援護や、教科書の検閲で偏見のない見解も見出せなかつたので、1909年の申請では、許可が降りた。

1912年には、宗祖親鸞聖人六百五十回大遠忌の記念として、布哇別院の新築が決まり、1918年には、ガンドーラ風の新別院の工事が完了した。

そして、1932年12月22日今村恵猛は、心臓発作のために六十七歳でこの世を去るまで、開教総長とし

て、ハワイ教団の発展に努めたのである。

第二章 今村恵猛とアメリカニゼーション

第一節 アメリカニゼーションの誤解

今村恵猛のハワイ伝道において、最も注目すべき事柄に「アメリカニゼーション」への仏教的な対応が挙げられる。

守屋氏の『アメリカ仏教の誕生』では、アメリカニゼーションとは、「アメリカ化していない新来の移民を対象に展開されたナショナルリズム運動という側面」¹⁵をもった運動としている。また、「移民たちがアメリカにいらがら母国への帰属意識を捨てず、エスニック・グループの中にとどまってホスト社会と隔絶することは、国内に分裂を生じかねないという恐怖心を招き、母国の文化を捨て去ることと並行してアメリカへ全くの忠誠を示す事が強調」された。そして、ハワイにおいては、その対象として日系移民が筆頭に挙げられたのである。

では、アメリカ人は具体的にどういったことを日系人たちに求めたのか。『アメリカ仏教の誕生』では、「しばしばいわれるように、アメリカ人の主張は百パーセントのアメリカニゼーションであり、具体的には母国の文化的伝統を全て捨て去り、英語を話してアメリカ的文化を身につけ、キリスト教徒になることを意味」¹⁶していた。つまり、日系人たちに日本の文化・風習を捨てて、西洋的な慣習を身につけて、英語を喋り、仏教からキリスト

禁 廠

教徒への改宗を意味している。

日系人社会において当時、最大の宗教教団であったハワイ教団も、この問題について対応を求められることとなる。この時、ハワイ教団は、日本人子女のための日本語学校の事業を行っていた。何より、ハワイの地で仏教、浄土真宗の伝道の為にある教団であるが、アメリカニゼーションの運動によって、その進退が岐路に立たされるのである。

では、アメリカ人たちは、なぜこれら異国の文化を否定するのだろうか。特に、信教の自由が許されているアメリカで仏教がなぜ批判されるのかについて焦点を当てつつ、アメリカニゼーションに対する今村の反応を見ていこう。

仏教がアメリカニゼーションの中でどのようにアメリカ人の目に映ったのか。『アメリカ仏教の誕生』では、アメリカ人から見た仏教について以下のように説明されている。「仏教は日本特有の民族宗教であり、「非アメリカ的」あるいは「反アメリカ的」な教義を日本人信徒に説いている「偶像崇拜」だ」¹⁷と、認識されていたようである。アメリカ人にとって、仏教は、せっかくハワイへ移住してきた日本人たちに日本のミカド崇拜を教え込み、アメリカに忠誠を誓わず日本への忠誠を促していると、映ったようである。

『本派本願寺布哇開教史』によると、1916年3月10日、ハワイ教団は、アメリカ人の間で成立された市民啓発会より、日本人系市民の啓発の為に、啓発に賛同することを求められた。ハワイ教団は、「宗教に偏せず眞の米國市民として日本人系市民の啓発をなすの意あらば賛同すべく、(中略)遂に市民啓発運動に参加する事」とな

そこで、今村は、布哇中学校講堂で行われた第一回日本人系市民啓発講演会で、「市民啓発運動に就て」という題で、講演を行い、これらの問題について以下のように返答している。

由来本願寺は、一部内外人前に於て、常に二重の誤解を蒙りたり、一は偶像崇拜の一種なりてふ誤解、二は頑迷なる国家主義に立つてふ誤解これなり。偶像崇拜の一種なりてふ非難に對しては、何故文明国民は毎日國旗、ツギ切に對して朝禮行ふかと反問せば事理判明せん。ツギ切は国家的生命の象徴なり。其れと同じく木像・繪像は宗教的生命の象徴なり。我らはこの生命を名けて阿弥陀仏といふ。印度語にて無量壽、無量光、大悲大慈を意味す。英語にては三エルス、即ち Life Light Love の本尊と云べし。眞宗信者は此スリイ、エルスの佛教に南無するなり。(中略)予は如何なる民族の理想も、如何なる教化の目的も、其本質に於て三エルス以外にあるべからざるものと信ず。こは恐らく日本人の理想たると共に、又亜米利加人の理想たるべし。(中略)この三エルスの御佛を本とする宗教が、頑迷なる國家主義に立つてふ非難の非理論的なることは、多く辨明を要せざらん。事實として本願寺の經營せる學園の亜米利加的事^{さき}は、曩に英文を以て發表せる學園の趣意書にて明白なり。但し本願寺は王法為本の宗旨なるを以て、國家に對する忠誠の勵むべきを教

ゆ。 19

今村は、この講演の中で、ハワイ教団に対する誤解として、偶像崇拜と日本への忠誠を説くことへの批判について次のように弁明している。

偶像崇拜という批判に対しては、アメリカ人がアメリカ国旗に朝礼をすることを例にとり、アメリカ人にとって国旗が、彼らの国家的生命の象徴であるならば、今村ら仏教徒が木像・絵像に礼拝するのは、それが仏教徒にとって宗教的生命の象徴であると主張している。そして、その対象である阿弥陀仏は、無量寿、無量光、大慈大悲であり、英語で言うところの、*Life Light Love* の“スライエルス”と説明している。このスライエルスは今村が、阿弥陀仏を英語で説明するのによく使ったものである。

また、「如何なる民族の理想も、如何なる教化の目的も、其本質に於て三エルス以外にあるべからざる」と述べているように、阿弥陀仏の教化の対象が日本人だけでなく、アメリカ人までもその対象という今村の姿勢がここから伺える。

日本への忠誠を説いているという批判に対しては、真宗の王法為本を取り上げ、「国家（ここでは、アメリカ）に對する忠誠の勵むべきを教ゆ」と、アメリカへの忠誠を説いていると述べており、また、「日本人は日本の國家に忠誠なるべし。夫と共に憲法に依りて亜米利加市民たるものは、須らく其所屬の邦國に對して、一心一向の忠誠を勵むべし」と述べ、日本生まれの一世は日本に對して、アメリカ生まれのアメリカの市民権を持つ日系二世に対しては、アメリカへの忠誠を説くべしと述べている。また、「本願寺の教育事業」という論説でも、ハワイでの布教における王法為本について言及している。今村が、真宗の王法為本に説くところの忠君愛國を、日本から移民してきた父兄とその子供との間で、日本とアメリカへの忠義に分けて説いていたことがわかる。

第二節 今村のアメリカニズム

しかし、今村はアメリカニゼーションによる批判に対して誤解を解くだけでなく、むしろその根源となるアメリカ人の「アメリカニズム」への根本的な見直しを行っている。

この点については、まず、嵩氏の指摘によれば、今村は、「仏教とアメリカのアメリカニズムとの調和は、たゞ容易なことではないにしても、自分の理解するところでは「一味乳水」であり、本来一致調和しており、将来その実現は不可能なことではない」と認識していたとされる。しかし、守屋氏は「ホスト社会の方がそれを上回る形での徹底したアメリカニゼーションを要求していたことは、皮肉にも「米化」しつつある日本語学校を「非アメリカ的」であると批難」²¹されていたとも指摘している。

しかし、今村は、「佛教とアメリカニズムとは果して相容れないものであらうか。決して相容れないものではないと自分は堅く信じて居るのである」²²とその確信を強く主張している。

今村は、1918年の秋にアメリカ大陸を視察したことを踏まえて、自分の信じているアメリカニズムについて次のように記している。

一、 アメリカニズムの名に於いて他の宗教宗派を排斥することは、明白にアメリカニズムに背反しアメリカニズムの濫用であると云ふ事。

二、 アメリカニズムは決して完成したのではなくして、現に完成しつつあるもの。死したる典型に^{かん}箱入されたものではなくして生成発育中にある、変化適応自在なるものであると云ふ事。

三、 アメリカニズムは決して純一無雜排他的のものではなくして、凡てを抱擁し網羅し、之をたとへば百川を吞吐する大海の如く万星を羅列する対空の如きものであると云ふ事。²³

嵩氏はこの今村の考えについて、「良心の独立」と「信教の自由」を求めて新大陸へやってきたアメリカ建国の歴史から見て、特定の宗教を排斥することは、本来のアメリカニズムでは無いと、今村の主張の重要性を指摘し、また、今村が、アメリカ思想の特色を「一に自然の感化に強い事」「二に人間の理性、能力に對する自信の強い事」「三に超越主義にあらざりて現實主義であるといふ事」「四に因縁主義にあらざりて果報主義であるといふ事」²⁴と述べている点について、嵩氏は「そこから生まれるアメリカニズムでは、不変の真理や定義・形式は求められず、たとえば真理といつても役に立つ間だけが真理であり、真理そのものも変わっていく」²⁵ことが読み取れることを指摘している。

また、嵩氏は、今村がアメリカニゼーションより起こる批判をただの批判として捉えるのではなく、それを止揚する立場として自らの理解するアメリカニズムが、「我本願寺の米國領土に於ける方針」として具体的に提示されていることを、論文中で指摘している。²⁶

その今村の方針を以下にあげておく。

一、 自分等は、如何に歴史の權威を振りかざして基督教が亜米利加魂の精髓であると謂ふ人があつても、それは少しも恐れることはない、唯自己奥底の信仰如何を顧みるべきである。

二、 然雖、米國に於ける佛教信徒、眞宗信徒は、単に祖先父母婚戚が信徒なるが故にといふのみの因縁本位

の信徒、傳統中心の信徒にては眞の意義をなさぬ。習慣傳統に屈從するは奴隸根性として米國人の最も排斥する處である。故に隣人とか祖先とかといつても信仰を語るものがあれば、たとへ其れが佛教徒なり基督教徒なるを問はず其の何れを論せずして、其の根性は既に米國精神と矛盾するものと解すべきである。

三、米國に在るもも信仰及び信仰の基調は、其の信仰が過去にあらずして、自他の現在と将来とに如何なる交渉を持つか、如何に善き事を招致するかを、先ず決定せられねばならない、夫故一宗一派が如何に多數の信徒を持つとしても、それが前述の如き無理想の信徒ならば其一宗一派に取りては何の眞価 Credit とならぬ。寧ろ却て恥辱である。現在及び将来に招致する眞實ある Real Material good 其れが信仰を批難する唯一の準尺である、所謂實用主義的試験 Pragmatic Test といふは此のことである。

四、プラグマチック、テストに及第する以上、即ち自他の現在と将来とに對して、自己の信仰が眞實の Good 實質ある Good を齎^{とつ}らすことが出来るといふ確信ある以上、それが外國種の宗教であらうとそれが如何なる人を始祖としやうと、決して少しも遲疑躊躇することはないのである。

五、故に自分等が親鸞教を此地に傳道するに當つて、此地が基督教地であるといふやうなことは、励みにはなつても、失意 Discouragement にはならない。唯我眞宗は日本に起つて在留同胞と因縁の深いといふ事だけを理由としてでは無意義である。却て此の米國國民生活に對して、如何に寄与貢獻をなすかといふことを、如實に具体的に提示して進むべきであらねばならない。 27

この方針の内容を要約すると、キリスト教徒が歴史の権威を振りかざして、それが「亜米利加魂」であると言っても、恐れる必要はなく、ただ自分の信仰を抛り所にするれば良い。しかし、自分の親類が真宗だからといって、自分も真宗という因縁本位の信仰は、真宗信徒であれ、キリスト教徒であれアメリカニズムに明確に反するし、また、その信仰は、過去ではなく、現在と将来とにどう関係するかが肝要となる。自身の信仰が実質のあるものであれば、それが外来の宗教であっても、問題はない。よって、自分たちが真宗を信仰することは、むしろ励みであり、逆に因縁によつてのみの信仰は無意味である。また、アメリカ社会に如何に貢献できるのかを提示する必要があると、今村は述べているのである。

嵩氏によれば、このような、今村の「アメリカニズム」という、コスモポリタンの性格を持った思想は、同時に本願寺が展開したアジア開教にはみられることのない特色であると指摘している。また、「今村が、一方的に浄土真宗の普遍性を独善的に主張するのではなく、アメリカ社会の価値の根底にあるアメリカニズムの意味を再確認するかたちで、そのことを明らかにし、(中略)普遍的な立場から浄土真宗の開教を展開するための大きな思想転換を遂げた事の表明」²⁸であるとも考えられる。

そして、そこから導き出される、アメリカにおける真宗の伝道は、何を説いていくべきか。今村は、「此の自由平等の境地に立つて、畏るる所なく大胆に、我が真宗の教旨を自己批判しなければならない」と、自己批判をすることを踏まえて、日本の歴史と習俗が結合した浄土真宗を省みて、次のように述べている。

一には親鸞聖人の生涯に現れてゐる革命的精神 Revolutionary Spirit を力説するということである。今更い

ふまでもなく現存する佛教各宗の教祖の中で、親鸞聖人ほど獨立獨行の精神を思切つて發揮されたものは尠ないと思ふ。九十年の生涯は自ら変化を求めて變化せられた。教規を無視し戒律を破壊し、非僧非俗の生活様式に住し、苟も信ずる所に従つて変化することを辞せぬ。其處に親鸞聖人の大覺悟が有つたのである。

二には偶像破壊 Iconoclastic の精神である。當時教權主義の本山であつた南部北嶺の由緒をも冷眼視し、三世の諸佛も三乗の經論釋もすべて棄てて顧みず、純一六字の南無阿弥陀佛と終始せられた眞精神である。三には此阿弥陀佛の選択主義である。選択とは名の示す如く公平無私の態度に立ちて一切を研究し批判し各

の価値意義の存するところを明にして一切に對する人類の誤解を闡きひら匡ただし正當なる理解のもとに普段にこれを綜合し想像し不斷に完成するの謂である。阿弥陀佛の根本理想即本願はこの主義に立ちて組織され且實現したものである。その根本義たる救済の事實、方法、その對象たる人類、主体たる彼自らに至るまでこの公平無私なる態度によりて研究し批判し綜合し創造せられざるものは一つもないのである。

この主義はまた吾等人間生活の基準である、特に吾米國民精神の上に偉大なる合致と教訓とを併せ有するものなることを信ずる。第十八願を選択するといふことである。

四には其の實現主義である。佛教に所謂因願酬報といふのである。(中略)然るに佛教に於ては因位即ち衆生として居る時に、即ち我々と同格の時に志を立てる之を本願といふ。其の本願に基いて思惟する、修行する、出来上がった處を成佛といふ。(中略)阿弥陀仏とは、願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國の本願を起し、それに必要な一切の智徳を、五劫の思惟と永劫の修行とに依つて實現せられた知恵無量、

慈悲無量、即ち光明無量、寿命無量の佛である。即ち功績 Merit に依つて出現した如来である。自分等は生得権に立つ本尊を渴仰せずして修得権に依る如来を崇拜するのである。²⁹

ここまで示してきたように、今村は「アメリカニゼーション」による仏教批判を受けた上で、それを否定するのではなく、寧ろその思想の根底は仏教的であり、その思想を根底に据えた上で、浄土真宗の信仰のあり方を今までの因縁主義でなく、自己の現在と未来において、実質的なものであるべきだと主張している。そして、それは、日本人だけでなく、アメリカ人にも当てはまることであると見ているところが今村の思想の特徴として注目されるのである。

第三章 今村恵猛と真宗の主体性

今村恵猛は、「我本願寺の米國領土に於ける方針」において、自身の見るアメリカニズムを紹介し、そこからアメリカにおける浄土真宗の信仰のあり方を明確に提示している。

守屋氏は、今村の「立教開宗の判釈」について、

世界に向かって「絶対他力の弥陀教」があらゆる教えの根本にある、と説いて勧めていくためには、まず真宗が他のあらゆる教義や思想とどう関係にあるのか、どの点において根本的な教えであるのかを明らかにする「判釈」の作業が必要であり、それは「特に海外の布教に従事する」上で不可欠なのだ³⁰。

と説明し、今村にとつての「判釈」はアメリカニズムとは何かを追求することによって行われたと指摘している。

『米国の精神を論ず』での、今村の「此の自由平等の境地に立つて、畏るる所なく大胆に、我が真宗の教旨を自己批判しなければならぬ」という発言は、米国での布教を行うにあたって、浄土真宗の教義に対する見直しといえるのではないだろうか。

浄土真宗本願寺派勸学寮頭であった、桐溪順忍氏は、『龍谷教学』第二号（龍谷教学会議、1967年）の「真宗学の主体性の問題―真宗学方法論の齟―」で、真宗学の主体性について言及している。

桐溪氏がこの問題に言及した理由は、当時の真宗学会での教義についての発表を受けて、桐溪氏が、これが親鸞聖人の教えだと言っているのかと疑問を持つ問題にしばしば遭遇し、真宗学の主体性、根元をなす中心思想の問題を、自覚的に取り上げられているのかと疑問を投げ、また、当時の真宗学にあった異説について、それらの諸問題は、真宗教学の主体的な立場の究明によって解決されるのではないかという疑問から生じている。

そこで、桐溪氏は主体性を、「浄土真宗が、他の宗教・仏教と異なった特殊性、しかも、それが教義の根底になり、信仰者の生活の中心的なささえとなつてゐる性格」、すなわち、「浄土真宗の教義はこれなくしては成立せないといい、その根本性格ともいふべきもの」と定義し、科学的態度で、真宗学方法論の一つとして提示している。

桐溪氏は、「主体性ということとは科学にはあり得ないこと」とことわりつつ、「この場合は、真宗学の主体性として、対象化されている問題であるから、科学的対象となり得るのではないか」と可能性を見出そうとしている。

「もし、主体性の究明に、主観的なものが加えられたら、それはその人のものであって、真宗学の主体性とは

いえなくなるので」あり、「真宗学の主体性は真宗学全体に通ずる主体性でなくてはならない」としている。宗教においては各宗教が独立しており、教相判釈をもつて、その宗その宗に、他の宗と比較して、明瞭な特色があり、その故、その宗教としての主体性をもつのである。

そこから、浄土真宗も一宗派として独立している以上、特色があり、主体性があるのであるが、その当時の真宗研究者が自覚的にその問題をとりあげていないのではないかと疑問を呈している。

桐溪氏は、宗教の表現について、その根底には、その人の信仰、安心が動いており、その表現の根底となるものの基礎は、その信仰者の「人間である」という立場からであると述べ、だからこそ、信仰はかくあるはずだという主体性がおこることは自然であると主張している。

今村の主張する「親鸞教の信仰の実質」は、アメリカにおける浄土真宗の主体性の確立の一つの側面といえるのではないだろうか。もちろん、その主体性は、今村のアメリカニズムに則った上のものであり、今村恵猛という人間を通して映ったものである。

しかし、この姿勢は、今村が『米国の精神を論ず』で述べている、アメリカニズムに関する今村の所感の三点を考慮したうえで主張したものであり、嵩氏の述べるように「普遍的な立場から浄土真宗の開教を展開するための大きな思想転換」であると言える。

結論

今村恵猛の功績と、彼の提唱したアメリカニズムについてはこれまで述べてきたとおりである。仏教がほとんど伝わっていなかった土地に仏教を伝える為、浄土真宗に偏らない布教を行った。仏教を知ってもらおうべく、外国人の仏教徒を招いて、彼らの口を通して仏教を紹介し、その地位を高めるよう努め、また、移民してきた日本人とその子女の為に学校の建設や、仏教青年会を立ち上げ、彼らが英語を学ぶ場と活動する場を作る為に努力を惜しまなかった。

何より、アメリカニゼーションによる仏教批判に対して、アメリカ人の主張を正面から否定するのではなく、それを受けてハワイ教団のあり方を自己批判し、ハワイ、アメリカで浄土真宗を布教する上で、アメリカ人に「浄土真宗とは何か」ということを彼のアメリカニズムに則って提示している。今村は、アメリカニズムの果報主義である点を強調し、その考え方は仏教的であると主張した。そこから、浄土真宗の信仰のあり方についても、信仰は、過去ではなく、自身の現在と将来にどう関係するかが重要であって、それが実質のあるものであったならば、たとえ外来の宗教である浄土真宗でも問題は無い、と今村は考えていたようである。

そこから、アメリカにおける浄土真宗の主体性については、この今村の述べる「親鸞教の信仰の実質」が一つの側面であると私は考える。

しかし、留意しておくことに、桐溪氏の述べた真宗学の主体性と、今村恵猛の掲げるアメリカニズム則った浄土真宗のあり方は、両者の浄土真宗に対する捉え方が違う点があげられる。桐溪氏は、真宗学という学問の上か

ら浄土真宗を捉えたのに対して、今村は布教を行う一人の開教使としての立場から浄土真宗を捉えている。この両者の立場の違いから生じるニュアンスの違いについては、まだ今後の考察が必要だと思われる。

コピ—廠禁

- 1 守屋友江『アメリカ仏教の誕生』三―四頁
- 2 『浄土真宗本願寺派アジア開教史』十七頁
- 3 『本派本願寺布哇開教史』二十八頁
- 4 『本派本願寺布哇開教史』二十六―二十七頁
- 5 常光浩然『日本佛敎渡米史』三四―一頁
- 6 『本派本願寺布哇開教史』三十八―三十九頁
- 7 『本派本願寺布哇開教三十五年紀要』一頁
- 8 『本派本願寺布哇開教史』三十六頁
- 9 『本派本願寺布哇開教史』九十九頁
- 10 常光浩然『日本佛敎渡米史』三四―九頁
- 11 『本派本願寺布哇開教三十五年紀要』一二十六頁
- 12 常光浩然『日本佛敎渡米史』四六―五頁
- 13 嵩満也「初期ハワイ本願寺敎団と今村恵猛」三〇―九頁
- 14 今村恵猛『米国の精神を論ず』三十六―三十七頁
- 15 守屋友江『アメリカ仏教の誕生』一三五頁
- 16 守屋友江『アメリカ仏教の誕生』一三五頁
- 17 守屋友江『アメリカ仏教の誕生』一五七頁
- 18 『本派本願寺布哇開教史』一四一頁
- 19 今村恵猛『超勝院遺文集』七十四頁
- 20 嵩満也「初期ハワイ本願寺敎団と今村恵猛」三二―一頁
- 21 守屋友江『アメリカ仏教の誕生』一五三頁
- 22 今村恵猛『米国の精神を論ず』十一頁

禁廠

コヒ

3 2 2 2 2 2 2 2
0 9 8 7 6 5 4 3

今村惠猛『米国の精神を論ず』十二頁
今村惠猛『米国の精神を論ず』二十一頁
嵩満也「初期ハワイ本願寺教団と今村惠猛」三十二頁
嵩満也「初期ハワイ本願寺教団と今村惠猛」三十三頁
今村惠猛『米国の精神を論ず』四十三―四十四頁
嵩満也「初期ハワイ本願寺教団と今村惠猛」三十三頁
今村惠猛『米国の精神を論ず』四十八―五十頁
守屋友江『アメリカ仏教の誕生』一一四頁

コピ― 廠禁

参考文献

論文

守屋友江『アメリカ仏教の誕生―二〇世紀初頭における日系宗教の文化変容―』現代資料出版 2001年

嵩満也「初期ハワイ本願寺教団と今村恵猛」『国際社会文化研究所紀要』第11号、2009年
桐溪順忍「真宗学の主体性の問題―真宗学方法論の一齣―」『龍谷教学』第二号、龍谷教学会議 1967年

書籍

新保義道『ハワイ開教九十年史』山喜房佛書林 1987年
中西直樹・吉永進一『仏教国際ネットワークの源流 海外宣教会（1888年～1893年）の光と影』三人社 2015年
常光浩然『日本仏教渡米史』佛教出版局 1964年

禁版

『仏教海外開教史資料集成 ハワイ編 第3巻』 不二出版 2007年

今村恵猛『超勝院遺文集』 布哇ホノルル本願寺 1936年 『仏教海外開教史資料集成 ハワイ編

第3巻』に収録】

今村恵猛『米国の精神を論ず』 金尾文淵堂 1921年 『仏教海外開教史資料集成 ハワイ編 第

3巻』に収録】

土岐慶哉訳『ハワイ開教小史―ハワイ本派本願寺―』 百華苑 1999年

『海外開教要覧』 浄土真宗本願寺派 海外開教要覧刊行委員会 1944年

『本派本願寺布哇開教史』 本派本願寺布哇開教教務所 1918年

『本派本願寺布哇開教三十五年紀要』 本派本願寺布哇開教教務所 1931年

上山大峻監修『浄土真宗本願寺派アジア開教史』 本願寺出版 2008年

福嶋寛隆・藤原正信・中川洋子編『反省（會）雑誌』 永田文昌堂 2005年

